

父と暮せば

井上ひさし

音楽と闇とが客席をゆっくりと包み込む。

しばらくしてどこか遠くでティンバニの連打。遠方で稲光り。

——やがてバラックに毛が生えた程度の簡易住宅が稲光りの中に浮かび上がってくる。現在は昭和二

十三（一九四八）年七月の最終火曜日の午後五時半。ここは広島市、比治山ひじやまの東側、福吉美津江ふくよしの

家。間取りは、下手から順に、台所、折り畳み式の卓袱台ちゃぶだいその他をおいた六帖の茶の間、そして本箱や文机のある八帖が並んでいる。なお、八帖には押入れがついている。

……と、茶の間の奥に見えていた玄関口かすりに下駄を鳴らして、美津江が駆け込んでくる。二三歳。旧式の白ブラウスに、仕立て直しの飛白かすりのモンペをきりっとはいて、ハンドブック代りの木口の買い物袋

をしつかりと抱いている。茶の間に足を踏み入れたとき、またも稲光り。美津江、買物袋を抱き締め、
たまま畳に倒れ込み、両手で耳を塞いで、

美津江 おとつたん、こわーい！

押入れの襖がからりと開いて上の段から竹造、

竹造 こっちじゃ、こっち。美津江、はよう押入れとだなへきんちやい。

竹造は白い開襟シャツに開襟の国民服。雷よけに座布団を被っているが、美津江にも座布団を投げてや
って、

竹造 ななにゆーにをしとるんね、はよう座布団だぶとんかぶって下段したへ隠されんさい。

美津江 (ギクリが半分、うれしさも半分) おとつたん、やっぱあ居おってですか。

竹造 そりゃあ居るわい。おまいが居りんさいいうたら、どこじやろといつじやろと、わしは居るんじや
けえのう。居らんでどうするんじや。

美津江　じゃけんど、こげえド拍子もない話があつてええんじやろうか。こげえ思いも染めん話が……、

竹造　なにをぐどりぐどりいうとる。はようこつちへ……（閃光に）ほら、来よつたが！

美津江　（押入れへ入りこみながら）……おとつたん！

遠のいて行く稲光りと雷鳴。その合間を縫って押入れの上段と下段で、

竹造　おとつたんと押入れと座布団と、味方が三人もついとるけえ、ピカピカがこようが、ドンドロが鳴

ろうが、もう大丈夫じゃ。

美津江　じゃけんど、うちやあもう二十三になるんよ。ええ大人がドンドロさんが鳴るいうてほたえ騒い
どる。情けのうてやれんわ。ほんまに腹の立つ。

竹造　（断乎として）おまいが悪いんじやない。

美津江　……どうも。

竹造　おまいはこないだじゆうまで女子専門学校の陸上競技部のお転婆で、ドンドロさんが鳴りようが
平気で運動場を走り回つたじゃないか。

美津江　（大きく頷いて）部員が三人しかおらんかったけえ、短距離から長距離まで、うちが一人で受け
持つとつた。そいじゃけん忙しゅうて忙しゅうて、ドンドロさんなぞに構うとられんかった。

竹造 その肝きもの太ふていおまいが、こげえ騒さわぐようになったんはなひてじゃ。

美津江 ……それがようわからんけえ、おとろしゆうてならんよ。

竹造 ほいでに、いつから、そがあなつたんじゃ。

美津江 三年ぐらい前から、かいね。

竹造 あのピカのときからじゃろうが。

美津江 やっぱあ……？

竹造 (頷うないて) 富田写真館のぶの信ちんを知つとろうが？

美津江 うちらしじゆう写真を撮つてもろうとつたね。

竹造 腕うでのええことじゃあ広島でも五本指に入る写真屋じゃ。

美津江 ほいでにおとつたんと組なんでいっつもあぶないことをしとつてでした。

竹造 ……あぶない？

美津江 あのころ、おとつたんはうちんとこ、福吉屋旅館をまるごと陸軍将校の集会所に貸しとつたけ

え、その伝つて手てで物資ものがぎようさんあつて、

竹造 あったよのう。お米にお酒、鮭缶に牛缶、煙草にキャラメル、押入れとだなにはなんでもありようた。おまいはまだねんねんのおかやん亡のうくした女の子おなごんこじゃけえ、母の愛には飢えても物に飢えさせたらいいん思うて、おとつたんはいのちこんかぎり……、

美津江 お米や煙草で釣おなごしゆって女子衆を温泉へ連れ出して、湯に入つとるところを信ちゃんおじさんがこそつと写真に撮って、それを将校さんたちに見せとってでした。ほいから……、

竹造 (さえぎって) じゃけえ、その信ちゃんは、いまは駅前マーケットでええ加減な芋羊羹を売ってってじゃ。

美津江 知つとる。

竹造 立派な技量を持つとるあの信ちゃんがなひて闇屋の真似をせにや生きて行けんのか、

美津江 裸写真を撮ばちった罰があたつたんよ。

竹造 まじめに聞かになあいいけん。

美津江 ごめん。

竹造 あれからこつち、マグネシウムがピカッ、ボンいうて光りよるたんびに、あのピカの瞬間が、頭の中に、それこそよう撮れた写真を見るようパツと浮かび上がってくる、そいがおとろしゅうてどもならん

けえ、写真屋はやめた、信ちゃんはそがいいうとった。つまり、マグネシウムもドンドロさんもピカによ
う似とるけえ、信ちゃんも、おまいも、ほたえるようになったんじゃ。

美津江 ……ほうじゃったか。

竹造 ほうじゃが。理由があつて、ほたえとるんじゃけえ、恥ずかしい思うちやいけんど。そいどころ
か、ピカを浴びた者は、ピカツいうて光るもんにはなんであれ、それがたとえホテルであつてもほたえまく
つてええんじゃ。いんにや、けっかそれこそ被爆者の権利ちゅうもんよ。

美津江 そがん権利があつとつてですか。

竹造 なけりや作るまでのことじゃ。ドンドロさんにほたえんような被爆者がおつたら、そいはもぐりい
うてもええぐらいじゃけえのう。

美津江 (ピシャリと) それはちいっと言いすぎとつてですよ。

竹造 そりやまあ、ごもつともじゃが……。 (縁側へ這い出して空模様を窺い) やあこれは。お日さん
が出とりんさる。

美津江 (少し這い出して見て) ほんまじゃ。

竹造 ドンドロさんはどうやら宇品の海の上へ退き^のゃんしたげな。

美津江 やれうれし。

ほっとして立つと台所から小さな土瓶と湯呑を持ってくる。

美津江　今朝、図書館へ出る前に入れとった麦湯があるんよ。飲もうか。

竹造　そりゃあええのう。

美津江、二つの湯呑に注いで自分のを一気に飲む。竹造、湯呑を口まで持って行くが、とんと下において、

竹造　わしゃよう飲めんのじゃけえ。

美津江　あ、そうじゃったかいね。

美津江、竹造の分もおいしそうに飲む、竹造、それを食っているように見ていたが、

竹造　これは大変ことじゃ。

美津江　どひたんな？

竹造　饅頭じゃが。さっき図書館で、木下さんがおまいに饅頭くれんさったろうが。あれ、まさか潰れと
りやせんじやろうの。

美津江　……いけん。

今しがたまで大事に抱えていた買い物袋から、新聞紙で包んだものを出してそっと開く。

……大判饅頭はどうやら無事。

竹造 (感嘆して) どっしりしとる。

美津江 駅前マーケットに出とったんじゃと。

竹造 近頃出色の饅頭じゃ。

美津江 木下さんも、一目見たとたんぴたり足が止まったいうとられた。金縛りにでも会おうたようにどが

いしてもその前を通り抜けられん、ほいで一個買こうたが、まだ足が重うてならんけえ、引き返してもう一個買うたら、ようやつとふだんのように歩けるようになったんじゃと。

竹造 たしかにそれだけの迫力は備わつとるで。

美津江 ほいで木下さんは図書貸出台におつたうちんとこへきて、こげえいいんさったんよ。ぼくは二つもよう食えんけえ、一つは福吉さんがたべてつかあさい。(二つに割る) たべようね。

竹造 そいじゃけえ、わしやあよう食えんのじゃ。

美津江 あ、そうじゃったか。

美津江、食べながらもう半分を紙で包む。

生つばをのみながら見ていた竹造、気を取り直して、

竹造　それをおまいにくれんさったあの木下という青年じゃがの、今日、ここの文理科大学の先生じゃいうておいでじゃったのう。

美津江　（頷いて）この九月から物理教室の授業囑託をなさるんじやと。

竹造　授業囑託いうと……？

美津江　助手のことじや。

竹造　（なんども頷きながら）牛乳瓶の底より分厚い眼鏡めがにをかけて、いっつも大きな鞆たもとをかかえて、ほいで落ち着いた話し振りをしとってで、こりやごついインテリさんじゃあるまいか、そがあ睨にらんどったが、やっぱあのう。

美津江　ピカの年まで呉の海軍工廠こうしょうで工員養成所の教官をしておられたんじやと。海軍技術中尉ちゆうゐじゃったんと。

竹造　海軍さんにしちやあ、どっか泥臭どろくしいところもあつとってじゃがのう。

美津江　そりやいろんな海軍さんがおるわいね。ほいで戦いくささが終わってからは二年間、母校の東北帝大で大学院生をやつとられて、今月、七月のあたまたまたこっちへ戻りかへんさつたいうことじゃげな。そうじや、ピカのすぐあと、この広島ひろしまの赤土あかぢの焼け野原を一日かけて歩き回まわったことがあるいうとられたよ。

竹造 おいくつぐらいかのう。(推測して) 三十……??

美津江 二十六じゃと。図書貸出表にはそう書いとられたけえ。

竹造 ほいでおまいが二十三とくるけえ、こりやよう釣り合う^おとる。

美津江 (一瞬ニコリ、だがすぐ猛然と腹を立てる) なにをいうとってですか。木下さんはただの利用者じゃけえ。

竹造 (断言する) ただの利用者が饅頭なんぞようくれんぞ。

美津江 ばからしゆうて、もうやつとられん。さあ、晩の支度じゃ。おとったんはまだ居ってん?

竹造 そりやおまい次第じゃろうかのう。

美津江 ほいじゃ、そのへんをきれいにしといてつかあさい。

美津江はエプロンつけて台所へ行き弁当箱(木製)を洗い出す。

竹造もエプロン^{はた}つけて叩きなどを持ち出すが、まったく怠けて、

竹造 いまの話じゃがのう、木下さんはおまいが気に入ったけえ、饅頭をくださったんじゃ。そこらへんをもうちつとわかってあげにやあいけん。

美津江 おとったんは饅頭に意味を求めすぎます。

竹造 饅頭にも意味ぐらいあらあのう。おまいにその意味を読み取る勇気がないだけじゃ。

美津江 木下さんにはお礼のつもりでくれんさったんよ。それだけのことじゃ。

竹造 そがいに言い切ってええんじやろか。

美津江 おとつたんたら！

美津江、茶の間へきて改まる。

美津江 ちよつとこつちへきて坐つてつかあさい。……四日前、先週金曜のお昼すぎ、「原爆関係の資料がありますか。市役所へ行ったら、図書館で訊いてみてくださいと言われたんですが」いうてこられた方があって、その人が木下さんじゃったんよ。ふだんのうちなら、おいとりません、ですませてしまうんじやけど、なんかしらん、木下さんの声の調子が一途いちずじゃった。ほいで、こげえ説明してあげたんよ。「原爆資料の収集には占領軍の目が光つとつてです。たとえ集めたとしても公表は禁止されとつてです。それに一人の被爆者としては、あの八月を忘れよう忘れよう思うとります。あの八月は、お話なもない、絵になるようなこともない、詩も小説なもない、学問になるようなこともない、一瞬のうちに人の世のすべてがのうなつていました。そがいなわけですけえ、資料はよう集めておらんのです。それどころか資料が残つとるようなら処分してしまいたい思うぐらいです。うちも父の思い出になるようなものはなんもかも焼き捨ててしましました」……饅頭はそのときのお礼、それだけのことじゃ。

竹造 図書館には貸出台が二つ並んどって、どっちゃんにも女の子の館員おなごんこが坐つとる。

美津江 へえ、高垣さんとうちじゃが、そいがどないしたんな。

竹造 あのピカからこっち、おまいはすっかり人変わりしおって、いまじゃ無口の、愛想なしの、いっつも伏し目がちの女の子おなごんこ、笑ういうたらここへ帰ってきてからぐらいなもんじゃ。ひきかえ、高垣さんは明るい人柄で評判じゃ。

美津江 じゃけえ、そいがどないしたいうて訊いとるんです。

竹造 なひて木下さんは、寄り付きやすい高垣さんではのうて、愛想なしのおまいに話しかけてきなさったんか。そこんところが大事じゃ、ふつうなら高垣さんのところへ行くくんが筋道いうもんじゃろうが。

美津江 そがあことは木下さんの勝手でしよう。

竹造 じゃけえ、わしやこげえいたいんじゃ。木下さんはえらい上にかしこいお人じゃてな。おまいはもともと氣立てもよきや頭も冴えた明るい女の子おなごんこ、なんせえ女専を二番で卒業したほどの才女じゃけえのう。木下さんはおまいのその本来の姿を一目で見抜きんさって、おまいに興味をもった。これが饅頭に隠されとった意味じゃ。

美津江 いつまでも突飛とっぴなことをいうとつたらええです。(台所へ立つ)何日でもそこでばかばかりいうとりんさい。うちはもう知らんけんの。

竹造 饅頭に隠されたもう一つの意味はなんじゃろか。

美津江 饅頭の話はもうやめてちょうだい。

竹造 こいはおまいにとって大事中の大事じゃけえ、あくまで饅頭の意味を追求せにやあいけん。

美津江 ここんどこへきてにわかに見れてきんさって、ばかばかりいってですけえ、うちやあもう、

あたまあ痛うてやれんわ。

竹造 結句おまいも木下さんを好いとるんじゃ。たがいに一目惚れ、やんがて相思相愛の仲になるいうことよのう。見かけはごつう固そうじゃが、中味はえつと甘い。おまいの心は饅頭とよう似とる。

美津江 (叫ぶ) そがいなことはありえん。……人を好きになるいうんを、うち、自分で自分にかたく禁じておるんじゃけえ。

竹造 木下さんをなんとも思っておらんのじゃったら、おまいは今日その場で饅頭を突き返しとったはずじゃ。

美津江 いつも静肅に！ そいがうちの図書館の第一規則なんよ。「こないだはどうも。饅頭どうぞ」

「うち困ります」「そう言わずにぜひどうぞ」「饅頭をいただくんは規則で禁じられとります」……窓口

でそがいなへちやらこちやらした問答がでける思うとんの。館長さんも主任さんも、ほいて隣りの高垣さんも、みんな聞き耳を立てとるんよ。黙って貰うとくよりほか術はありやせんが。

竹造 明日は木下さんと会うんじやろう。昼休みに図書館近くの千年松で会おういう約束をしとったろうが。

美津江 それも断ろう思うたんじゃけえ……、

竹造 窓口でいつまでもへつたらこつたら問答しとるわけにはいかんかったいうんか。

美津江 ほいじゃけえ、ウンちゆうて領いただけのことじや。

竹造 ありやあのう……、

美津江 おとつたんもよう見とつてつかあさい。明日は木下さんに、二度とうちに声をかけんでくれんさ

いいうて、はつきりことわつてくるけえ。

竹造 なひて万事そがい後ろ向きにはかり考えよるんじや。木下さんを好いとるなら好いとるでええじやないか。こっちはあっちを好いとる、あっちもこっちを好いとる。そいじゃけん、こっちとあっちが一緒になれたらしあわせ。これが木下さんのくれんさった饅頭のまことの意味なんじや。

美津江 うちはしあわせになつてはいけんのじや。じゃけえもうなんもいわんでつかあさい。

竹造 これでもおまいの恋の応援団長として出てきとるんじやけえのう、そうみやすうは退かんぞ。

美津江 ……応援団長？

竹造　ほうじゃが。よう考えてみんさい。わしがおまいんところに現れるようになったんは先週の金曜からじゃが、あの日、図書館に入ってきんさった木下さんを一目見て、珍しいことに、おまいの胸は一瞬、ときめいた。そうじゃったな。

美津江　（思い当たる）……。

竹造　そのときときめきからわしのこの胴体ができたんじゃ。おまいはまた、貸出の方へ歩いてくる木下さんを見て、そつと一つためいきをもらした。そうじゃったな。

美津江　（思い当たる）……。

竹造　そのためいきからわしの手足ができたんじゃ。さらにおまいは、あの人、うちのおる窓口へきてくれんかな、そがいにとつと願うたろうが。

美津江　（思い当たる）……。

竹造　そのねがいからわしの心臓ができとるんじゃ。

美津江　うちに恋をさせよう思うて、おとつたんはこないだからこのへんをぶらりたらりなさつとつたんですか。

竹造はにっこり笑う。

美津江　恋はいけな^{めん}い。恋はようせんのです。もう、うちをいびらんといてくれんさい。

竹造　そがいに強うこころを押さえつけとってはいけないがのう。あじもすっぱにゃーもない人生になってしま
よるで。

美津江　もうおちよくらんでくれんさい。うちやあ忙しゆうしとるんです。晩の支度が待っててです。
明日の準備も待っててです。夏休み子どもおはなし会いうて、うちら図書館の館員が十日間、子どもたち
にお話をしよるんです。比治山の松林の中の涼しい風の通り道に、毎日、三、四十人もの子どもたちが集ま
ってきてくれとる。どの子もうちらの声や松の梢こずえを渡る風の音が好きなんです。みんなたのしみにして
れとるけえ、準備はきっちりせにやあいけんのです。

美津江はザクザクと玉菜キャベツを刻み出す。竹造、その様子を見ていたが、やがてそのへんを片づけながら
玄関口の方へ後退して行く。美津江はなおも必死でザクザクザク……。ゆっくりと暗くなる。

2

音楽の中から、三十ワットの電球にかぼそく照らし出された八帖間が静かに浮かび上がってくる。
……縁先に蚊いぶしの煙。

一日たった水曜日の午後八時すぎ。

電球の下、文机の上で、白ブラウスにモンペの美津江が鉛筆でなにか書いている。

……書き終えた美津江、それを横目でちらちら見ながら、「おはなし」を始める。

まだ棒読みにも毛の生えた段階で、美津江はときおり、訂正の筆を入れたりもする。

美津江 ……むかしから、この広島は、「七つの川にまたがる美しい水の都」として知られてきました

が、それら七つの川は郊外の北の方で一本にまとまって太田川おおたがわになります。そのころのおねえさんは、国文

科のお友だちと、毎週のように太田川ぞいの村むらへ出かけて、土地に伝わる昔話を聞いて回るのをたのしみにしていました。ほんまいうと、行った先で出してくれんさるカキの味噌雑煮とか、松茸入りの混ぜ御飯

とか、こんにやくの味噌べつたりとか、御馳走ごちそうをいただく方がずんとたのしみじゃったけえ、熱心に歩き回

ったんでした。こいからお聞かせするんも、そのころ、あるお年寄りから教えてもらうた昔話の一つです。そんなときは確か焼き鮎をいただいたように思います。（せき払い一つ）さて、その太田川からちよんびり山ん中に入ったところに、おじいさんとおばあさんが住んどったそうじゃげな。おじいさんは欲ぼけの

怠けもん、げえに至らぬ男でちいとも働こうとせんけえ、おばあさんが洗濯せんたくやら柴刈りやら焼き鮎づくりやら、なんやらかんやら一人でこなして、ようやっと暮らしを立てておった。

ある日のことじゃ。鮎とりに出かけたおばあさんは、あんまりのどが渴いたけえ、川の水を一口のんだ。ほいたらどうじゃ、顔のしわがいつぺんにのうなつて、もう一口のんだら、今度は腰が伸びて、もう一口のんだら、まぶしいほど見事なええ女子に若返つてしもうたんじゃ。帰つてきたおばあさんからこの話を聞いたおじいさんは、「なひてばあさんばかり若返るんじゃ。わしもおまいに負けんほどのええ若い衆になつてみせたるぞ」、そがい叫んで家から飛び出して行きよつたが、それっきり、夜になつても戻つてこん……、

台所でゴロゴロと摺鉢すりばちの音がする。

ねじり鉢巻の竹造がエプロンを着用、ときどき団扇を搦んで蚊を打ち払いながら炒り子いこを摺っている。

美津江 ……おとつたん？

竹造 よオ、まいにち暑いことじゃ。

美津江 居おつとつたですか。

竹造 そりや居るわい。丸一日ぶりじゃのう。

美津江　そのゴロゴロ、なんとかならんですか。えっと気になって練習にもなにもならんですけえ。(台所にきて電灯を点ける) なにしようるんの？

竹造　じゃこ味噌にきまつとるがのう。見んさいや、炒り子がええ塩梅あんばいに摺り上がつとろうが。

美津江　うちがじゃこ味噌つくろう思うとんのを、どうして知つとつたですか？

竹造　そのへんに炒り子と味噌がおいてあつたつけえ、それぐらいの見当つかはつくわい。

美津江　……。

竹造　さあ、ここへひしお味噌を入れる。

かたわらの井の味噌を摺鉢に放り込み、なおも摺る。

竹造　ほいで細こまこかくちぎつた赤とんがらしを加える。(美津江に) とんがらし、とんがらし。

美津江、そばの小皿から刻んだ唐辛子を摘まんで摺鉢に入れる。竹造、みごとに擦り上げて、

竹造　福吉屋旅館名物のじゃこ味噌、一丁上がり。

美津江　(なめてみる) うん、ええとこ行つとる。

竹造 おとったんの腕はまだ落ちとらんじゃろうが。ほいで、いまのはなしのつづきはどげえなん？ 欲ぼけじいさんはどがいなったいうんじゃ？

美津江 (頷いて) おじいさんが夜になつても戻つてこんけえ、心配になつたおばあさんが提灯さげて迎えに行くと、……川岸で、欲の深そうな顔をした赤ん坊がオギャーオギャー泣いとつたそうじゃげな。

竹造 そいじゃ、いまの子によう受けん。^ま品がよすぎるけえ。

美津江 むりに受けようとせんでもええの。

竹造 じゃけんど、ちいっとでもおもしろい方がええに決まತ್ತるけえ、そうじゃ、こがいに変えたらええ。

(語る) おじいさんは夜になつても戻つてこん。それつきりじゃ。心配になつたおばあさんが提灯さげて迎えに行くと、……川岸におじいさんの入れ歯が転がತ್ತるだけじゃつた。

美津江 ……

竹造 (受けないので意外) 欲たかりじいさんじゃけえ、若返りの水を飲みすぎよつたんじゃ。ほいで赤ん坊を通りこしてのうなつてもた……。

美津江 それぐらい、うちにもわかつとる。

竹造 おまいのオチよりやあ笑える思うがのう。

美津江 (叫ぶ) 話をいじっちゃいけんて！ 前の世代が語つてくれた話をあとの世代にそっくりそのまま忠実に伝える、これがうちら広島女專の昔話研究会のやり方なんじゃけえ。

竹造 六年前に県の視学官から大目玉をくろうた会じゃないか。いまは戦時じゃ、非常時じゃ、昔話の研究がなんの役に立つんじゃ、そんな暇があったら工場ではたらけいわれて、たしか昭和十七年の末までには解散したはずじゃが。

美津江 じゃが、研究会の根本精神はいまうちの身体ごたいに生きとってです。

竹造 ……今日の昼休みも、いまと同じこというて木下さんと口争いしとったな。

美津江 口争いなじゃない、あれは議論です。

竹造 じゃけんど、比治山の松林は涼しいけえ昼寝ずんどに一番ええ、そがい思うてきとった人らが、おまいが

あげよった大声に魂消たまげて起き上がとったぞ。

美津江 議論しとっただけじゃいうとんのに。

美津江、八帖に戻って原稿の暗唱につとめる。

竹造はじゃこ味噌を二つの容器（蓋つきの瀬戸物）に分けて詰めているが、

竹造 木下さんがピカに興味を持たれた始まりは原爆かわら瓦じゃいうのう。

美津江　　そがあいうとられたね。

竹造　　あの年、八月の末、郷里の岩手へひとまず引き揚げることになって呉から広島に出てこられた木下さんは、列車の時間まで焼け野原をあちこち歩き回つとられた。お昼になったけえ、大手町の、お不動さんがあつたあたりに腰をおろして弁当をひろげたが、そんなときじゃいうのう、海軍将校用の上等なズボンを通してお尻にチクチクという痛みがきよつたのは……。

美津江　　腰を下ろしたところに原爆瓦があつたそうな。

竹造　　見ると、瓦にはびっしり棘のようなもんが立つとる。そいも一本のこらず同じ方向に突き出しとる。こいは瞬間的な熱、そいも信じられんほど高い熱で一瞬のうちに表面が溶けてできたもんおもてにちがいない。

……なんちゆう爆弾か。この爆弾のことをよう知らにやいけん、この高熱の中でいったい何が起こつたんか、そいをもつとよう知らにやいけん。木下さんはそがいなに思うて、道みち原爆瓦を拾い拾い駅へ向かうたいう。

美津江　　そがいにもいうとられたね。

竹造　　おまいはそのときの原爆瓦のうちの一つを預かってきとつたはずじゃが。

美津江、本棚のてっぺんから風呂敷包みを下ろす。

美津江 預かったわけじゃない、木下さんがうちにむりやり押しつけて去ってしまおうたんです。

竹造、受け取って卓袱台の上でほどく。中に紙製の平たい菓子箱。

竹造、その蓋をとって凝然。菓子箱の内容は、原爆瓦（五センチ四方）、ぐにやぐにやの薬瓶、そしてガラスの破片が数片。

美津江 （代わりに取り出すが、たいへんな抵抗がある）被爆者の身体から出たガラスのかけら。

竹造 ……むごいことよの。

美津江 原爆瓦。

竹造 ……とげとげしいことよの。

美津江 熱で曲がったもうた水菓の瓶。

竹造 ……おとろしいことよの。

美津江 木下さんここには、これとおんなじに奇体に曲がったビール瓶じゃの、ホルンのように丸うなっ

てしもうた一升瓶じゃのが、何十本もあるいうがの。他にも、熱で表面が溶けて泡立っとる石灯籠、針の影が文字盤に焼きついたり大時計……。せいじゃけえ、入ってまだひと月にもならんのに木下さんは、下宿から追い出されかかっとなるんじゃげな。

竹造　　ほんまかいの？

美津江　　（頷いて）資料抱えて帰るたんびに、下宿のおかみさんが、「そがーそんなもん持ち込んできび気味が

わりー悪い」わリーいうてこぼす。「いまにきつと床が抜けよるけえ、もっと下宿料いただかにや、なんぼにもとてもやれん」いう

て、ぎょうさん嫌味いやみゆうをたれる。原爆瓦を石油箱で一つ持ち込んだおとつい一昨日の夕食ばんなんかえっぽどひどかったい

う。お茶碗やわんの御飯まんまの盛りが少のうなつとる、お汁おっいの実もへつとる。

竹造　　薄情な話よのう。

美津江　　ほいじゃけえ、木下さんは今日、うちにこがいき訊いってじゃった。「むりを承知きでお願いしま

す。原爆資料を図書館で保存してもらうわけにはいきませんか」

竹造　　やっぱあ、むりかいのう。

美津江　　（大きく頷く）マツカーサーが「うん」いうたら話は別じゃけえどね。その場でことわるのも気の毒じゃけえ、一日考えさしてくれんさい、いうといた。じゃけえ、明日も昼休みに会わなにやいけん。ほんま手のかかる利用者もおつとつてじゃ。

竹造　　ハンカチ貸しんさいや。

美津江　　へえ？ ……へえ。

竹造、じゃこ味噌入りの容器を美津江から受け取ったハンカチで包みながら、

竹造　じゃこ味噌、木下さんの分、ちゃんと入れといたけえ、明日、持ってってあげんさい。

美津江　おとつたら、もう……。

竹造　男ちゆうもんはなぜか女子のハンカチに弱い。
なんて おなご

美津江　おせっかいやき。異いなげな気なふうに気を回しちやいけんいうとんのに。

竹造　せえなら主任さんに上げてもええんじゃけえ。

美津江　主任さんのおかみさんはごつつやきもちやきじゃけん、誤解されたらかなわんけえ。

竹造　せえならやっぱあ木下さんにあげりやええ。

美津江、ぶんぶんしながら文机において、

美津江　ここたがあなことは二度とせんでちよんだいよ。

竹造　それより木下さんとの議論、なにがもとじやったか思い出してみんか。

美津江 ……おしまいにも木下さんがこげえいうとってでした。「あなたの被爆体験を子どもたちに伝えるためにも、ぼくの原爆資料を使うて、なんかええおはなしがつかれないものでしょうか」

竹造 木下さんちゅう人間は知患者じゃのう。

美津江 できん、そげえいうとききました。話をいじっちゃいけんちゅうのが、うちの根本精神ですけえ。

竹造 またそれかいの。そりや自分らで集めた話じゃけえ、こだわるのもわからんことはないが……。

美津江 それでも、木下さんがうちにこの資料を押しつけんさるだけで、ちいとも折れてくださらんけ

え、できんことはできませんいうて、つい大声を上げてしもうたんです。ま、こんなところかいな……。

竹造 待ちんさい。いま、なにかひらめきよった。

美津江 あ、それ、おとつたんの十八番、あてにならんことの代名詞。ひらめくたんびに新しい商売じゃ

の、女子衆なんかおなごしゅに手を出して、おじつたんの遺した身上のこ、小さな旅館のほかはなんもかも……。

竹造 たとえ身上をふやしとっても、結句はピカで全部、灰にされとったわい。いうたら先見の明があったんじゃ。

美津江 そがあなこというたら、一生懸命、はたらいとられた方に無礼じゃけえ、ほんまに。

竹造 わかつとる。じゃがええか、おまいらの集めた話をしようとするけえ、おつどれすつどれの口喧嘩になるんじゃ。だれもが知つとる話、そいに原爆資料を入れ込んではどうじゃ、ほいたら木下さんがよろこびんさるわい。

美津江 夏休みおはなし会は子どもたちのためのものです。

竹造 わかつとる、じゃがええか、桃太郎さんでもええ、さるかに合戦でも一寸法師でもええ、よう知られとる話の中に、おまい、原爆資料をくるみ込んでみい。

美津江 どげえに？

竹造 そいは本職のおまいが考えることよ。

美津江 だいたい占領軍の目がそこら中でぴかぴか光つとんのよ。おとつたんは占領軍の権力を知らんけ

え、そげえなのんき坊主ぼうずいうとられるんよ。

竹造 (ひらめく) またきよつた……。

美津江 うちゃあ、おはなしを覚えにやいけんの。もう居おつてもらわんでもええですけえ、また来てちよんだいの。

竹造 (かえって堂々として) そいじゃが。おまいがしよるんはおはなしじゃけえ、言うそばから風がおまいのことばを四方八方へ散らばしてくる。よい子たちのころの中を通り抜けたおまいのことばは風のとって空へのぼり虹になる。証拠はのこらん。比治山を吹き抜ける広島風の風がおまいの味方なんじゃ。

言いながら竹造はエプロンの、下に二つ、上に一つあるポケットに木下青年の原爆資料を入れる。

竹造 参考になるものやらならんものやらよう分からんが、聞いてつかあさい。(おはなしが始まる) —

寸法師……、おやわんお椀の船で京の都へ上ったあの一寸法師のことはみんなもよう知ってってじゃの。お姫様を

救おうと赤鬼の口の中へ踊り込み、縫い針の刀でどんばらなかいお腹の中をチクチク刺し回って、とうとう鬼めを降参させ

てしもうた、つえー強いのう、たしかに強い。つえーじゃけんど、ヒロシマの一寸法師はもつと、えつと、ごつう強いん

じゃ。

美津江 ……ヒロシマの一寸法師？

竹造 (大きく頷いて) 「福吉美津江エプロン劇場」のはじまり！

竹造 エプロン劇場……。

竹造 (また頷いて) エプロンのポケットをいい具合えいがいに使うて話をしっかり盛り上げるわけじゃ。さて、

赤鬼のお腹どんばらんの中へ飛び込むまではおんなじじゃが、その先は大けにちがうぞ。(おはなしに戻る) 赤鬼の

お腹どんばらんの中に飛び込んだヒロシマの一寸法師は、(エプロンの右下のポケットから原爆瓦を出して高く掲げ)

この原爆瓦を鬼めの下っ腹に押しつけて、

『やい、鬼。おんどのれの耳くそだらけの耳の穴かっぼじってよう聞かんかい。わしが持つとるんはヒロシマの原爆瓦じゃ。あの日、あの朝、広島の上空五百八十メートルのところ原子爆弾ちゅうもんが爆発しよったのは知っちよろうが。爆発から一秒あとの火の玉の温度は摂氏一万二千度じゃ。やい、一万二千度ちゅうのがどげえ温度か分かつとんのか。あの太陽の表面温度が六千度じゃけえ、あのととき、ヒロシマの上空五百八十メートルのところに、太陽が、ペカーツ、ペカーツ、二つ浮いとったわけじゃ。頭のすぐ上に太陽が二

つ、一秒から二秒のあいだ並んで出よったけえ、地面の上のものは人間にんげも鳥も虫も魚も建物も石灯笼どーろも、一瞬のうちに溶けてしもうた、根こそぎ火泡を吹いて溶けてしもうた。屋根の瓦も溶けてしもうた。しかもそこへ爆風が来よった。秒速三百五十メートル、音よりも速い爆風。溶けとった瓦はその爆風に吹きつけられていっせいに毛羽立って、そのあと冷えたけえ、こげえ霜柱のような棘がギザギザと立ちよった。瓦はいま

や大根だいこんの下ろし金、いや、生け花道具の剣山。このおっとりしいギザギザで、おんどりや肝臓を根こそぎ摺り下ろしたるわい。ゴシゴシゴシ、ゴシゴシゴシ……』

痛いとうて痛うて赤鬼は顔の色を青うしてからにそのへんを転げ回ってのた打った。

怯えている美津江。

竹造、左下のポケットから薬瓶を出して掲げ、

すぐさま、ヒロシマの一寸法師は熱で溶けてぐにやりと曲がった薬瓶を取り出し、

『やい、鬼。こんどはこの原爆薬瓶で、おんどりやの尻の穴に、内側から栓をしてやるわい。ふん詰まりでくたばってしまやあええ』

竹造、上のポケットからガラスの破片を出して掲げ、

『……やい、鬼。これは人間の身体からだに突き刺さったガラスの破片ぞ。あの爆風がヒロシマ中のありとあらゆる窓ガラスを木っ端微塵に吹ツ飛ばし、人間の身体を、（涙声になっている）針ネズミのようにしくさったんじゃ……』

美津江 (いつの間にか左の二の腕を押さえている) やめて!

竹造 『このおっとりしいガラスのナイフで、おんどりや大腸や小腸や盲腸を、千六本にちよちよ切っちゃるわい』……。

美津江 もうええですが!

竹造 ……どえりやー非道いものを落としおったもんよのう。人間が、にんげおんなじ人間の上に、ひーお日さんを二つも並べくさつてのう。

摺鉢などを片づけながら、

竹造 原爆資料を話の中に折り込むいうんは、それがどげな話であれ、広島にやーの人間には、つらやっぱりあ辛つらいことかもしれん。これはよう覚えちよかにやなりませんのう。木下さんにおまいを気に入ってもらおう思うてやったことじゃが、わりー悪いことをした。わしのひらめきちゅうやつはあーどうもいけん。

片づけものを持って台所の奥深くへ消えながら、

竹造 木下さんに上げるお土産、明日はじゃこ味噌だけで我慢してちよんだいや。

美津江　いろいろ気を使うてくれんさってありがとありました。（ト見るがない）……おとったん？
おとったん？

ゆっくりと暗くなる。

3

音楽の中で雨が降っている。

明るくなると前場の翌日、木曜日の正午すぎ。天井から雨が漏っており、その雨粒を茶の間に五つ六つ、八帖間じょうまに六つ七つと置いてある井いんぶりや茶碗ちやわんが正確に受け止めている。

茶の間の下手ぎわに、大鍋と飯炊めした釜がまを足もとに置き、片手に小鍋を下げた竹造が立ち、試験場の監督官のような目つきで二つの雨漏りを見張っている。

……と、茶の間と八帖の境目に新しい雨漏りを発見。竹造、童唄わらべうたのようなもので囃しながら井や茶碗の間を石蹴り式に巧みに塗って行ってそこへ小鍋を置き、

竹造 ゆうべの雨あみやは、りはつな雨じゃ。夜中に降って、朝には止やんだ。

と元の位置に戻る。もっともすぐ、遠方の八帖の文机の上に新たに雨が漏っているのを見つけ、飯炊き釜を抱えて出動する。

竹造 いま降る雨は、あんぽんたんな雨じゃ。朝から降りよって、昼になっても止まん。

文机をずらして飯炊き釜を置くが、こんどは文机の新しい置場所に迷う。そこでひとまず文机を持って、

竹造 雨、雨、止まんかい、おまいのとったんごくどうもん、おまいのおかやんぶしようもん。

元の位置まで戻ってくる。置場所を探しているうちに、文机の上の便箋と封筒に目が行く。文机をその場に置き、その前に坐って封筒の宛名を読む。

竹造 「広島市外府中町鹿籠二丁目……、滝沢様方、木下正様、みもとに」。みもとに……？

ばかになっさりする。つぎに便箋を読む。

竹造 (とところどころ声に出す) 「前略。いつも市立図書館をご利用くださいます。……お目にかかせていただいているときはいつも忙しくしており、……(頭の上に雨粒。大鍋を頭に載せて防ぎながら) これは大切なことですのでお手紙で、……お集めになっている原爆資料……、もしも私のところでよろしければ……、一人住まいです。置場所は……、多少、雨漏りはいたしますが……、このところきびしい暑さが……、おからだくれぐれも……。かしこ」

美津江が帰ってくる。玄関口で唐傘の雨を払っているのへ、

竹造 はーもどったんか
もうお帰りか。

美津江 ……あ、おとったん。

竹造 おお、いさせてもろうとるよ。お昼になったばかりじゃいうのに、どうしたいうんじゃ。

美津江 この雨で、おはなし会が流れてしもうた。

竹造 (頷いて) どうせなら夜中のうちに降りやええののう。子どもたちがかわいそうでやれん。……忘れ物か。

美津江 ……早引けです。

竹造　どっか悪いんか。(愕然として)まさか、吐き気がするいうんじゃあるまいな。へてから、立ちくらみ、耳鳴り、腹つかえ、下り腹。……まだ原爆病が出よるんか？

美津江　このごろは出はせん。てやー

竹造　それならええが……。

美津江　あいかわらずシクシクしとるんは(左の二の腕を軽く押さえて)ここぐらいなもん。ぐりやー

竹造　それなら安心じゃ。(元気づけて)あの根性悪こんじょうわるの外道者げどーもんもえんやと退散したのかもしれんう。

美津江　そう思わせて安心させといて、いきなりだまし討ちにくるけえ、死ぬまで気は許せんけえど。

竹造　うーん、面倒なものを背負しようてしもうたものよのう。……あれ？

縁先に出て空模様を見る。

竹造 やったあ。ようやらやっと雨が上がってくれよかった。これ以上降ると、置くものがのうなってしまう。うとこじゃったんじゃ。まさかここへ風呂桶こけいふうおけを運び込むわけにも行かんけえのう。

雨漏りが止んだあたりの井や茶碗を五つ六つ片づけて卓袱台を組み立てて置き、坐る場所をつくってやる。

竹造 ほいで、いい具合えーがいに行ったかいのう。

美津江 いい具合……？

竹造 じゃこ味噌のことじゃが。木下さん、よろこんでくれんさったか。

美津江 ああ、じゃこ味噌ねえ……。

竹造 これはぼくの好物であります、そがあいうとられはせんかったか。

美津江 まだ渡しとらんけえ……。

木口の買物袋から例のハンカチ包みを出して、卓袱台の上に置く。

美津江 ここにある。

竹造 どうしてここにあるんじゃ。

美津江 比治山へは行かなんだ。

竹造 どうして。

美津江 雨が降ったし……。

竹造 傘かさを持つとろうが。

美津江 道じゆりが緩くなつとるけえ、こけるかもしれんし、

竹造 下駄には歯ちゆうもんがあるど。

美津江 なによりも……、

竹造 なんじゃちゆうんじゃ。

美津江 木下さんと会おうちやいけん思うて……。

竹造 またそれかいの。おんなじことばつかしいよったら、しまいにや人ひとに笑われるど。

美津江 ほいで、作業室で本の修理しとった……。

竹造 いまからでも間に合うんとちがうんか

美津江 そのうちに、木下さんが比治山の方から図書館へ向かって歩いて来きんさるんが見えた。会うちや

いけん思うて、早引けさせてもろうてきた……。

竹造 (ぶるぶる震えている) 昔じゃったらここでゴツンと一発ぶしやあげるところじゃがのう!

美津江 おとったん、これでええん。うち、人を好いたりしてはいけんのです。

竹造 おりをしよると、あとでめげると。

美津江 ええいうたらええんじゃ。じゃけえ、もうほつといてくれんさいや。

美津江、そのへんを片づけ始める。

竹造 応援団長をなめちやいけん。

美津江 顔色いろめ変えてどうしたん？

竹造 すっぺーこっぺーごまかしいうちやいけんで。おまい、どこまでも木下さんを好いちやおらんいい張るつもりか。

美津江 じゃけえ、それは……、

竹造 聞くだけ野暮ちゆうもんじゃな。(文机の封筒と便箋を指して)「みもとに」。この脇わき付けにおま

いの気持がはつきり出とるじゃないか。

美津江 (一瞬、動揺するが) 女性ならだれでもそげえ書きよってじゃ。

竹造 「一人住まいですので置場所はございます……」、ただの利用者にあててこげえなことが書けるか。

美津江　それ、いたずら書き。捨てよう思うとったんよ。返してちょんだいの。

竹造　いらんもんなら、わしが捨てちやるわい。

美津江　おとったんたら……。

竹造、封筒と便箋をズボンのポケットに収めて、

竹造　どうして人を好いちやいけんいうんじゃ。たしかにおまいは人がたまげてのけぞるような美人じゃない。^なその半分はわしの責任でもある。じゃけんど、よう見りや愛敬のあるええ顔立ちをしとるけえ、そいはわしの手柄じゃ。

美津江　なにいうとるんね。

竹造　つずまり、木下さんがそれでええいうてくれんさつとるんじゃけえ、その顔でええんじやないか。

美津江　そういうことじゃない^ないうとるでしよう。

竹造　……もしかしたら原爆病か。あいつがいつ出てくるかもしれんけえ、そいで人を好いちやいけん思うとるんじやな。

美津江　（頷いてから）じゃが、木下さんが、そのときは命がけて看病してあげるいうてくれちゃったです。

竹造　　なんな、ずいぶん話は進んじやないか。(ひらめいて) そうか、生まれてくるねんねんのとかが心配なんじやな。たしかに原爆病はねんねんにも引き継がれることがあるいうけえ、やれんのう。

美津江　　(頷いてから) そのときは天命じや思うて一所懸命、育てよう……、

竹造　　そいも木下さんのお言葉かいの。

美津江　　遠回しにじやけど、そがあいうとられとってでした。

竹造　　遠回しであれ近回しであれ、そこまで話し合えるちゆうことは……、もう、わしや知らんが。

美津江　　そいじやけえ、いっそう木下さんと会おうちやいけんのです。

竹造　　ほんじやなにか、うまいこと行きやあうまいこと行くほどうまいこと行かんちゆうんか。

美津江　　あ、それはいえとる。

竹造　　たいがいにしとかんと、わしてもほんまに怒るで。話が一昨さきおとつい々日と明しあさ々後日とあべこべの方角を向
きよって、ついでにでんぐり返りやらさかとんぼやら打つとるけえ、なにがなにやらようわからん。

美津江　　(これまでにないような改まった声で) ここへ坐ってくれんさいや。

竹造　　……はい。

竹造、思わず美津江の前に坐ってしまふ。

美津江　うちよりもっとえっとしあわせになっええ人たちがぎょうさんおってでした。そいじゃけえ、その人たちを押しつけて、うちがしあわせになるいうわけには行かんです。うちがしあわせになっては、そがあな人たちに申し訳が立たんですけえ。

竹造　そがあな人たちいうんは、どがあな人たちのことじゃ。

美津江　たとえは、福村昭子さんのような人……。

竹造　福村……、ちゅうとあの？

美津江　（頷いて）県立一女から女専までずうつといっしょ。昭子さんが福村、うちが福吉、名字のあたまがおんなじ福じゃけえ、八年間通して席もいっしょ、陸上競技部もいっしょ。じゃけえ、うちらのことを二人まとめて「二福^{ふたふく}」いう人もおったぐらいでした。

竹造　二人じゃけええかったんじゃ。もう一人二人、福の字のつくんがおってみい、まとめて「お多福」、いわれとったかもしれんけえな。

美津江　（耐えて）……女専で昔話研究会をつくったんもいっしょ。昭子さんが会長で、うちが副会長でした。はなしをいじっちゃいけんちゅう根本方針も二人で話し合^あうて決めたことじゃったですけえ。

竹造　ほいであよに頑張^{がんば}ったんか。

美津江　ほうじゃが。

竹造　成績もしじゅう競^せったけえのう。

美津江 (首を横に振る) 駆けっこならとにかく、勉強では一度も昭子さんを抜いたことがのうて、うちはいっつも二番。これは多分、おとったんのせいじゃ。

竹造 ……いきなりいびつちやいけないめん。

美津江 なによりもきれいかったです、一女小町、女専小町いうてはや囉されてね。

竹造 あの娘このおかやんの方がきれいかったんがちがうか。裁縫塾をひとつで、おまけに未亡人で、あの人の前へ出ると、なんでかしらん、よう口が利けんのじゃ。

美津江 ほいで手紙を書いとったんやね、お米や鮭缶や牛缶つきの。「この春こそはごいっしょに比治山の夜桜を見たい思うとります福吉屋の竹造より。福村静枝様まいる」……。

竹造 どうしてそのようなこと知つとるんじゃ。

美津江 昭子さんが見せてくれたんです、「まいる、いう脇付けはすこしおかしいんちがう」いうてね。

竹造 ……おかしいですか。

美津江 「まいる」は女性が使う脇付けじゃけえね。

竹造 そんなもんを公開しちやいけんがな。見かけによらず人の悪い後家さまじゃ。

美津江 うちには実のおかやんのようにやさしゅうしてくれんさったわ。

竹造　　そいじゃけえ、おまいのほんまのおかやんになってくれたらよかったいうとるんじゃ。福村から福吉へ一字変えればすむことじゃけえのう。

美津江　（耐えて、改まって）昭子さんこそしあわせにならにやいけん人じゃったんです。

竹造　　じゃけえ、どうしてか訊いとるんじゃ。

美津江　　うちより美しゆうて、うちより勉強ができて、うちより人望があって、ほいでうちを、ピカから救うてくれんさった。

竹造　　……ピカから、おまいを？

美津江　　（大きく頷いて）うちがこよに生きておれるんは、昭子さんのおかげじゃけえのう。

竹造　　突飛をいいよる。あんとき、うちの庭にはわしとおまいの二人しかおらんかったはずじゃ。どこに昭子さんがおったいうんかいね。

美津江　　手紙でうちを救うてくれんさったんよ。

竹造　　手紙で……？

美津江　　あのころ昭子さんは県立二女の先生。三年、四年の生徒さんを連れて岡山水島の飛行機工場へ行つとられたんです。前の日、その昭子さんから手紙をもらうたけえ、うれしゆうてならん、徹夜で返事を書きました。ほいで、あの朝、図書館へ行く途中で投函しよう思うて、うち、こよに厚い手紙を持って庭を裏木戸の方へ歩いとった……。

竹造　　わしはたしか縁先におった。一升瓶につめた玄米を棒で突いて白くしとったんじゃが、石灯籠どろろのそばを歩いとったおまいを見て、「き気をつけて行きいよ」……。

美津江　　（頷いて）その声に振り返って手をふった。そんなときじゃ、うちの屋根の向こうにB29と、それからなんかキラキラ光るもんが見えよったんは。「おとったん、ビーがなんか落としよったが」

竹造　　「空襲警報が出とらんのにいなげ異なる気なことじゃ」、そがあいうてわしは庭へ下りた。

美津江　　「なに落としよったんじゃろう、また謀略ビラかいね」……。見とるうちに手もとが留守にな

って石灯籠の下に手紙てがみを落としてしもうた。「いけん……」、拾おう思うてちよごんだ。そのとき、いきな

り世間しよけん全体が青白うなった。

竹造　　わしは正面から見てもうた、お日ひさん二つ分の火の玉をの。

美津江　　……（かわいいそうな）おとったん。

竹造　　真ん中はままぶましいほどの白でまのう、周りが黄色と赤を混まぜたようなき気味がのわりい色のまげな輪わじやつた……。

少しの間。

竹造 (促して)ほいで。

美津江 その火の玉の熱線からうちを、石灯籠が庇^{かほ}うてくれとったんです。

竹造 (感動して)あの石灯籠がのう。ふーん、値の高いだけのことはあったわい。

美津江 昭子さんから手紙をもらうとらんかったら、石灯籠の根方^{ねかた}にちよごむこともなかった思います。そいじゃけえ、昭子さんがうちを救うてくれたいうとったんです……。

いきなり美津江が顔を覆う。

竹造 ……どうしたんじゃ？

美津江 昭子さんは、あの朝、下り一番列車で、水島から、ひよっこり帰ってきとってでした。

竹造 (ほとんど絶句)なんな……。

美津江 夜の補習のために、謄写^{とうしゃばん}版道具^{ひとそう}一揃いと藁^{わら}半紙^{はんし}千枚、そよなものがひよっこり要るようになって、学校へ受け取りに来られたんです。

竹造　ほいで、どうした？　まさか……。

美津江　にしかんおんまち西観音町のおかあさんここで一休みして、八時ちよつきりに学校へ出かけた。……ピカを浴び

たんは、せんだまち千田町の赤十字社支部のあたりじゃったそうです。

竹造　（唸る）うーん、

美津江　昭子さんをおかあさんが探し当てたのが丸一日あとでした。けど、そのときにはもう赤十字社の裏玄関の土間に並べられとった……。

竹造　なんちゆう、まあ、運なのない娘じゃのう。

美津江　（頷きながらしゃくり上げ）モンペのうしろがすっぽり焼け抜けとったそうじゃ、お尻が丸う現れとったそうじゃ、少しの便が干からびてついとったそうじゃ……。

少しの間。

竹造　もうええが。人なみにしあわせを求めちゃいけんいうおまいの気持が、ちいたちいとは分かったような気がするけえ。

美津江　……。

竹造　じゃがのう、こうよな考え方もあるで。昭子さんの分までしあわせにならにやいけんいう考え方が……。

美津江　（さえぎって叫ぶ）そよなことはできん！

竹造　なひてできん？

美津江　昭子さんのおかあさんとの、……約束があるけえ。

竹造　約束……？

美津江　（頷いて）約束のようなもの……。

竹造　どうよな約束いうんじゃ？

美津江　……昭子さんのおかあさんに会^おうたんは、ピカの三日あと、八月九日の午後遅くのことじゃった。……ピカの日^えに、うち、広島から宮島へ逃げて、九日の朝まで、堀内先生のうちで厄介かけとったけえ。

竹造　堀内先生？　どっかで聞いたような……。

美津江　女学校のときの生花の先生じゃ。

竹造　おお、あの年寄り先生か。

美津江　（頷く）……。

竹造　えた先生がおられて、えかったのう。

美津江 先生にはげまされて、朝、宮島をたつて、魚を焼くような臭いのたちこめる中を、昼ごろ、うちに着いた。

竹造 (いたわるように)きれいに焼けとつたろう。

美津江 泣き泣きおとつたんのお骨を拾いました。

竹造 ……ほうじゃったな。いや、ありがとうございました。

美津江 そいから西観音町の昭子さんところへ行つたんじゃが、あそこいらもすっぱり焼けて、うち

が訪ねたときは、おかあさんは防空壕の中で寝ておいでじゃった。背中に非常に大きな火ぶくれを背負っておいでで、腹ばいになってげっしやりなさつとつた……。

竹造 むごいことよの。

美津江 おかあさんはうちの顔を見てごつうによるこんで、ぶらあ起き上がると、うちを力いっばい抱きしめて、よう来てくれたいうてくれんさつた。ところが、昭子さんのことを話してくださつとるうちに、いきなりおかあさんの顔色が変わって、うちを睨みつけて(言えなくなる)……。

竹造 どうなさつたんいうんじゃ。

美津江 「なひてあんたが生きとるん」

竹造 ……!

美津江 「うちの子じゃのうて、あんたが生きとるんはなんでですか」

少しの間。

美津江　そのおかあさんも月末には亡おなっしまわれたけえど……。

竹造　つまらん気休めいうようじゃが、昭子さんのおかやんは、そんなとき、ちいーっと気が迷うて、そよなことを……、

美津江　（はげしく首を横に振って）うちが生きのこったんが不自然なんじゃ。

竹造　なにいうとるんじゃ……。

美津江　うち、生きとるんが申しわけのうてならん。

竹造　そよなこと口が裂けても口にすなや。

美津江　聞いてちよんだいの！

竹造　聞きとうないわい。

美津江　（構わずつづける）うちの友だちはあらかたおらんようになってしもうたんです。防火用水槽に直

立したまま亡おなつた野口さん。くちべろが真っ黒にふくれ出てちよなすびど茄子でもくわえているような格好

で歩いとられたいう山本さん。卒業してじきに結婚した加藤さんはねんねんにお乳を含ませたまま息絶え

た。加藤さんの乳房に顔を押しつけて泣いいとったねんねんも、そのうちにこの世のことはなにも知らずあの世へ去いってもうた。中央電話局に入った乙羽さんは、ピカに打たれて動けんようになってもうた後輩二人を

両腕に抱いて、「私らはここを離れまいね」いうて励ましながら亡^のうなつたそうです。あれから三年たつのにまだ帰つたらん友だちもおつてです。ほいて、おとつたんもおる……！

竹造　わしとおまいのことなら、もうむかしに話がついとる。よう考えてみいや。

美津江　いんねの。あんときの広島では死ぬるんが自然で、生きのこるんが不自然なことやったんじゃ。そいじゃけえ、うちが生きとるんはおかしい。

竹造　死んだ者はそうよには考えとらん。現にこのわしにしても、なんもかもちゃんと納得しとるけえ。

美津江　(さえぎって)　うちゃあ生きとんのが申し訳のうてならん。じゃけんど死ぬ勇氣も^なないです。

また、雨が降りだす。

美津江　そいじゃけえ、できるだけ静かに生きて、その機会がきたら、世間からはよう姿を消^きそう思うとります。おとつたん、この三年は困難の三年じゃったです。なんとか生きてきたことだけでもほめてやってちよんだい。

美津江が立って、玄関口へ行こうとする。

竹造 どこへ行くん？

美津江 本の修理をしのこしたままじゃけえ、やっぱあ図書館へ戻る。木下さんはもうおらん思う。

竹造 待ちんさい。

ズボンのポケットから封筒と便箋を出して、美津江に突きつける。

竹造 これは投函しときんさいや。

美津江 ……！

竹造 速達で。

美津江 そげえ無茶な……。

竹造 こりゃアおとつたんの命令じゃ。

竹造から押しつけられた封筒と便箋を手に震えている美津江。

竹造は雨漏りを見つけて、また井や茶碗を置いて行く。

竹造 雨、雨、止まんかい、おまいのとつたんごくどうもん、おまいのおかやんぶしょうもん……、

雨が激しくなり、それにつれて暗くなって行く。

音楽がおわるとすぐにオート三輪のエンジンの音がおこり、それにつれて明るくなると、前場の翌日、金曜日の午後六時。

茶の間の卓袱台に、木下青年とオート三輪の運転手が飲んだ湯呑茶碗が載っている。

八帖間から庭先にかけて、いましがた木下青年が持ち込んだ原爆資料でいっぱい。

新聞紙を敷きつめた八帖間に、溶解して首の曲がったビール瓶のケース、同じような五合瓶や一升瓶が五、六本、高熱で奇妙に歪んだ一升徳利、八時十五分を指したまま止まっている直径三十センチの丸時計、片側が焼けた花嫁人形などが置かれ、上手の壁ぎわに、茶箱や蜜柑箱なども積み上げられている。

庭の上手に、石灯笼いすづろうの上部が三つ。そしてそれに混じって、沢庵石たくあんぐらいの大きさの、顔面が溶解した地蔵の首。

エンジンをふかしていたオート三輪が、やがてのんびりと走り去ると、玄関口から、笑顔のをこした美津江が入ってくる。湯呑を台所へ下げ、布巾を持ってきて卓袱台を拭き始めるが、ふと、地蔵の首に目が行き、たちまち笑顔が凍りつく。

……やがて、こわごわ縁先へにじり出て地蔵を見ているが、さらに裸足のまま庭に下りて地蔵の首を自分の方へ向ける。思わず悲鳴に似た声。

美津江 ……あんときの、おとつたんじゃ！

それに応えるかのように、下手から火吹竹で肩を叩きながら竹造が入ってきて、

竹造 ……なんか用か、九日十日？

美津江、地蔵の首と竹造の顔を見比べていっそう硬くなるが、とっさに地蔵の首をあさっての方へ向けて、

美津江 居おつとられたんですか。

竹造 (頷いて) 古い洒落しやれはやっぱあ受けんのう。ほいで、木下さんは、もう一回、原爆資料を運んでくるいうとられたようじゃのう。

美津江 ……これでちょうど半分じゃそうです。

竹造 (感心して) ぎょうさん集められたものじゃのう。下宿のおかみさんばかり責めるわけにはいけんで、ほんまに。

美津江は足の裏をはたいて家へ上がり、卓欲台を拭き、台所仕事などをするが、これから先しばらく、彼女はいま生まれた動揺と格闘する。

竹造 木下さんの下宿からここまでの道のりのことじゃが、あのオート三輪の運転手はなんぼあつたいうとったかいのう。

美津江 ちよつきり片道一里十町、信号が六つ、踏切が一つ、そがあいうとったけえど。

竹造 ほいなら、あっちゃで積み込む時間を勘定に入れても、あと三、四十分もすれば、木下さんがまたここへきんさるわけじゃ。そんなとき、またようおいでましたいうて挨拶をすませたらすぐ、お風呂をおすすめせいや。

美津江 お風呂……？

竹造 (火吹竹を示して) こよな暑い日にやあ、お風呂が一番の御馳走ごっつおーじゃけえ。

美津江 お風呂を焚いといってくれさったん？

竹造 ほいじゃが。

美津江 ごつつ気の利く……。

竹造　だてに二十年も男やもめをやっとりやせんわい。ほいで、木下さんは熱い湯あちーが大好きか、ほいともぬるめがええんじやろか。

美津江　そよなことまでは知らんけえ。

竹造　それはそうじやのう。ほんなら適当に沸かしちよくが、湯上がりにはなにか冷たいひやいもんものを差し上げにやいけんで。

美津江　ビールを一本、買こうてあります。

竹造　そりやええ。せいでも運転手は冷たい水ひやいでええで。こんな日には冷たい水でも御馳走ごちそうじゃけえのう。

美津江　氷も五百匁もんめ、買こうといた。

竹造　ほいから運転手には早いんてう去いつてもらわにやいけんで。長居ながいされたらやれんけえ、用心しんじんせえや。

美津江　次の仕事があるそうじゃけえ。

竹造　(安心して)ほりやえかった。ほいから新にいなてのこいしい手拭てぬぐいを用意よういしとかにやあいけんで。

美津江 買ってあります。

竹造 シャボンも要るいで。

美津江 それも買ってあります。

竹造 軽石は……。

美津江 買ってあります。

竹造 へちまは……。

美津江 買ってあります。

竹造 ほいから男物の浴衣おとこもんじゃが……。

美津江 買って……、そがあもんあるわけなない。

竹造 (領いて)男物の浴衣まで用意しとったら、ちいーと外間わりが悪いけえのう。おまいもよう心得こころえとるじゃろうが、木下さんの背中を流すんはいくらなんでもまだ早いけえ、そがなことすなや。これまた外間わりちゆうもんがあるけえのう。

美津江 おとったん、薪をつがんでもええんですか。

竹造 わかつとる。そいで夕飯ほいでよーはんの御馳走ごちそうはなんじゃ。

美津江 ビールにじゃこ味噌。

竹造 そりやええ。

美津江 小さいわしのぬた。

竹造 ええが、ええが。

美津江 醤油めし。

竹造 (舌なめずりして) 醤油めしの加薬かやくはなんとなんとなんじや。

美津江 ささがきごんぼう、千切りにんじん、ほいから油揚げあぶりやうげとじゃこ。

竹造 ごつつ、ええのう。

美津江 ほいで仕上げが真桑瓜あじゅうりじゃ。

竹造 (ためいきをついて) わしも招よばれとうなってきよった。

美津江 (竹造を見つめて) ……おとったんが食べてくれんさったら、うちもうれしいんじゃけえどねえ。

竹造 (いきなり) 夏休みは取れるんかいね。

美津江 ……夏休み？

竹造 さつき出かけしなに、木下さんがいうとられたろうが。「夏休みが取れるようなら岩手へ行きませんか。九月の新学期までに一度、家へ帰ろう思うとるんです。美津江さんを連れて行ったら両親が非常によろこびますけえ」

美津江 ……夏休みは取ろう思うたら取れる思う。

竹造 ほいなら是非行ってきんさい。

美津江 岩手はうちの憧れじゃった。宮沢賢治の故郷じゃけえねえ。

竹造 その賢治くんちゆうんは何者かいね。

美津江 童話や詩をえっと書かれた人じゃ。この人の本はうちの図書館でも人気があるんよ。うちは詩が好きじゃ。

竹造 どがいな詩じゃ？

美津江 永訣の朝じゃの、岩手軽便鉄道の一月じゃの、星めぐりの歌じゃの……。

竹造 ほう、星めぐりのう。

美津江 (調子高く)「あかじめだまのさそり、ひろげた鷺のつばさ、あおじめだまの小さいぬ、ひかりのへびのとぐろ……。」星座の名をようけ読み込んだ歌なんよ。

竹造 星の歌なら小学校るときにつくったことがあるで。

美津江 ……ほんま？

竹造 (調子高く) 「今夜も夜になったけえ、三つ星、四つ星、七つ星、数えとったら眠とうて、とろりとねんねした。上じゃ星さん、ペーカペカ、下じゃ盗人ぬしとがごーそごそ森じゃ……」

美津江 ……！

竹造 風呂の火加減、見にやいけんけえ、あとは割愛じゃ。たしか二重丸もろうて、教室の壁に貼り出してもろうたはずじゃ。(去りかけて)木下さんが岩手へ行こういうて誘うたんは一種の求婚じゃ。そのへん、わかつとろうな。「森じゃふくろがぼろきて奉公せい、お寺じゃ狸たのきがぼんぼん……」

竹造は火吹竹を振り回しながら下手へ去る。

それを見届けて、美津江は庭に下り、改めて地蔵の首を見る。やがてころろが決まる。しっかりした足取りで家になると、押入れから大きな風呂敷を出して身の回りのものを包み始める。そこへ下手から竹造がやってきて、

竹造 木下さんは無精ひげを生やされとったけえ、剃刀かみそりを用意しとかにやいけんて。

美津江 剃刀のたぐいは家の中に置かんことにしとる。首の血管に切りつけて亡^のくなった被爆者がいくたりもおられたけえのう。風呂桶^{おけ}につけといた左手首の血管をあれですらっと切って死にんさった方もおつてです。

竹造 (美津江の様子を観察していたが) ……おまい、ひよつとしたら荷造りしよるんじゃないか。^なほいも岩手へ夏休み旅行に出かけようという荷物じゃなさそうじゃな。

美津江 (頷いて)堀内先生の生花教授のお手伝いをさせてもらおう思うとる。間ものう家を出れば、七時五分の宮島^{にや}行きの電車には乗れるじやろう。

荷物をまとめ終えた美津江は、卓誓に走り寄って便箋をひろげ鉛筆を構える。

竹造 (抑えながら)木下さんが戻ってきんさるんじゃないけえ、その案は考えもんでえ。だいたい人が招んでおいて途中で放り出す^{ほーくりだす}やつがあるか。ほいはごつつ失礼^{ひつれ}ちゅうもんよ。

美津江 この手紙を玄関口のよう目につくところに置いて出るんじゃないけえ、心配せんでもええのんです。

竹造　　せっかくの御馳走はどよになるんじや。くさるにまかせて蠅はえめらに食わせたるいうんか。

美津江　　一人で上がってもらうんじや。木下さんに、そよに書いとくけえ。

竹造　　風呂はどがあなるんじや。やっぱあ、勝手に風呂へ入ってちよんだい、いうて書くんか。

美津江　　(頷いて)そのあとの文章は……。 (ちよつと空くうを睨んで考えて)お帰りの節は雨戸んを閉め、玄関

の鍵をかけて出てつかあさい、鍵はお隣りに預けてくれんさい。ほいで最後の一行は、大切な資料はこのままお預かりしときます。じゃけんど、うちのことはお忘れになってつかあさい、取り急ぎ……。

竹造　　図書館にはもう出んのか。

美津江　　……ええ。

竹造、いつものややこしい病気がまた始まりよったな。

美津江　　……ちがう！

竹造　　いんにゃー、病氣じや。(縁先あちに上がる)わしゃのう、おまいの胸のときめきから、おまいの熱あちいためいきから、おまいのかすかなねがいから現れよった存在なんじや。そいじゃけえ、おまいにそがあな手紙を書かせとってはいけんのじや。

竹造、美津江から鉛筆を取り上げる。

美津江　　そいは大事な鉛筆えんぺつじゃけえ、うちに戻してや。昭子さんのお揃いなんじゃ。ピカのときにモンペの隠しに入れとったけえ、生き延びた鉛筆なんじゃ。

竹造　　おまいは病気なんじゃ。病名もちゃんとあるど。生きのこってしもうて亡なくなった友だちに申し訳ない、生きとるんがうしろめたいたいうて、そよにほたえるのが病状で、病名を「うしろめとうて申し訳ない病」ちゆうんじゃ。(鉛筆を折って、強い調子で)気持はようわかる。じゃが、おまいは生きとる、これからも生きにやいけん。そいじゃけん、そよな病気は、はよう治さにやいけんて。

美津江　　(思い切って)うちがまっことほんまに申し訳ないなと思うとるんは、おとつたんにたいしてなんよ。
竹造　　(虚をつかれて)なんな……？

美津江　　もとより昭子さんらにも申し訳ないなと思うとる。じゃけんど、昭子さんらにたいしてえっとえっと申し訳ないなと思うことで、うちは自分のしよったことに蓋をかぶせとった。……うちはおとつたんを見捨てて逃げよったこすったれなんじゃ。

庭へ飛び下り、カまかせに地蔵の首を起こす。

美津江 おとったんはあんとき、顔におとろしい火傷を負うて、このお地藏さんとおんなじにささらもさ
らになつとつてでした。そのおとったんをうちは見捨てて逃げよつた。

竹造 その話の決着ならとうの昔についてとるで。

美津江 うちもそよに思うとつた。そいじゃけえ、今さっきまで、あんときのこととはかけらも思い出し
あせんかった。じゃけん、今んがた、このお地藏さんの顔を見てはつきり思い出したんじゃ。うちはおと
ったんを地獄よりひどい火の海に置き去りにして逃げた娘じゃ。そよな人間にしあわせになる資格はない^な：
…。

竹造 途方^{とつけ}もない理屈^{もな}じゃのう。

美津江 覚えとつてですか、おとったん。はつと正気付くと、うちらの上に家がありよつたんじゃ。なん
や知らんが、どえらいことが起こつとる。はよう逃げにやいけん。そがあ思うていごい^ご動いとるうち

に、ええ^え具合^がに抜け出すことができた。じゃが、おとったんの方ははよう動けん。仰^あ向け^ぬざまに倒れて、首^だか

らは、柱じやの梁じやの横木じやの、何十本もの材木に、ちやちやらめちやくそこに組み敷かれとった。

「おとつたんを助けてつかあさい」、声を限りに叫んだが、だれもきてくれん。

竹造 広島中、どこでもおんなじことが起こつたんじゃけえのう。

美津江 鋸のこもない、手斧ちようのもない、木槌なもない。木材を梃子てこにして持ち上げよう思ったがいけん、生爪なまつめを

はがしはがし掘つたがこれもいけん……。

竹造 ほんまによう頑張つてくれたよのう。

美津江 そのうちに煙けぶたたい臭いがしてきよつた。気がつくと、うちの髪の毛まひげがチリチリいうて燃

えとる……。

竹造 わしをからだで庇かばうて、おまいは何度となくわしに取りついた火を消きしてくれたよのう。……あ
りがとありました。じゃが、そがあことをしとつちや共倒れじや。そいじゃけえ、わしは「おまいは逃げ
い！」いうた。おまいは「いやじゃ」いうて動かん。しばらくは「逃げい」「いやじゃ」の押し問答よの
う。

美津江　とうとうおとったんは「ちゃんぽんげで決めよう」いいだした。「わしはグーを出すけえ、かならずおまいに勝てるぞ」いうてな。

竹造　「いっぷく、でっぷく、ちゃんちゃんちゃぶろく、ぬっぱりきりりん、ちゃんぽんげ」(グーを出す)

美津江　(グーで応じながら)いつもの手じゃ。

竹造　ちゃんぽんげ(グー)

美津江　(グー)見えすいた手じゃ。

竹造　ちゃんぽんげ(グー)

美津江　(グー)小さいころからいつもこうじゃ。

竹造　ちゃんぽんげ(グー)

美津江　(グー)この手でうちを勝たせてくれんかった。

竹造　ちゃんぽんげ(グー)

美津江　(グー)やさしかったおとったん……。

竹造　(怒鳴る)なひてパーを出さんのじゃ。はよう勝って、はよう逃げろいとんのがわからんか、このひねくれもんが。親に孝行する思うてはよう逃げいや。(血を吐くように)おとったんに最後の親孝行をしてくれや。たのおで。ほいでも逃げんいうんなら、わしや今すぐ死んじやるど。

短い沈黙。

竹造 ……こいでわかったな。おまいが生きのこったんもわしが死によったんも、双方納得ずくじゃった。

美津江 じゃけんど、やっぱあ見捨てたことにかわりがない^な。うち、おとつたんと死なにやならんかったんじゃ。

竹造 (また怒鳴る) このあほたれが。

美津江 ……!

竹造 おまいがそがあばかたれじゃったとはのう。女専まで行って何を勉強しとった?

美津江 じゃけんど……、

竹造 (びしゃり) 聞いとれや。あんときおまいは泣き泣きこよにいうとつたではないか。^な「むごいのう、ひどいのう、なひてこがあして別れにやいけんのかいのう」……。覚えとろうな。

美津江 (かすかに頷く) ……。

竹造 応えてわしがいうた。「こよな別れが末代まで二度とあっちゃいけん、あんまりむごすぎるけえのう」

美津江 (頷く) ……。

竹造　わしの^{えつとー}一等おしまいのことばがおまいに聞こえとったんじゃろうか。「わしの分まで生きてちょんだいよオー」

美津江　（強く頷く）……。

竹造　そいじゃけえ、おまいはわしによって生かされとる。

美津江　生かされとる？

竹造　ほいじゃが。あよなむごい別れがまこと何万もあつたちゆうことを覚えてもらうために生かされとるんじゃ。おまいの勤めとる図書館もそよなことを伝えとるところじゃないんか。

美津江　え……？

竹造　人間のかなしいかったこと、たのしいかったこと、それを伝えるんがおまいの仕事じゃろうが。そいがおまいに分からんようなら、もうおまいのようなあほたれのばかたれにはたよらん。ほかのだれかを代わりに出してくれいや。

美津江　ほかのだれかを？

竹造　わしの孫じゃが、ひ孫じゃが。

短い沈黙の後、美津江はゆっくりと台所へ行き、庖丁^{ほうちよう}を握りしめる。そしてしばらく竹造を見てい

たが、やがてごぼうを取ってささがきに削ぎ^そはじめ。そのうちにふと、手を止めて、

美津江　　こんどいつきてくれんさるの？

竹造　　おまい次第じゃ。

美津江　　（ひさしぶりの笑顔で）しばらく会えんかもしれんね。

竹造　　……。

そのとき、遠方でオート三輪の音。

竹造　　こりゃいけん、薪をつぐん忘れとった。

竹造、すたすたと下手奥へ去る。美津江、その背へ、

美津江　　おとったん、ありがとありました。

オート三輪の音が近づいてくる気配のうちにすばやく幕が下りてくる。

（幕）

底本

『父と暮せば』 株式会社 新潮社

平成十三年二月一日 発行

平成十六年九月二十日 四刷